



# 新しい農産物の特産化の取組み

～カシスとぶどうの特産化に向けた挑戦の道のり～

## ワイン用「ぶどう」 ～ぶどうの産地が北上する中で新たな産地形成を目指す～

近年の気象変動によりワイン用ぶどうの栽培適地が年々北上しています。また、富士見町は塩尻、甲州の産地に囲まれた産地の空白地帯であることから、新たな特産品づくりの取組みとしてワイン用ぶどうの産地化に挑戦しています。

現在、耐寒性のある9品種の品種選抜と冬期の栽培方法の確立を目的とした栽培試験をサントリーワインインターナショナル株式会社の協力のもと、山梨県のぶどう生産者と連携して進めており、現在順調に試験は進み、3年目を迎えています。

今後は産地化に向け、生産計画と経営計画を作成し、本格的な事業化の作業に入ります。



定植【平成27年5月7日】

机地区の試験農場に耐寒性のある9品種のワイン用ぶどう苗を定植しました。

先例が少ない高冷地での産地づくりの取組みがスタートしました。



指導【平成27年5月7日】

試験栽培のアドバイスと生育評価はサントリーワインインターナショナル株式会社から受けています。現地には気象観測装置を設置して常にデータ収集しながら情報交換しています。



防寒試験【平成28年12月12日】

高冷地栽培の最大の課題は冬期の栽培方法の確立です。

ワラ、保温チューブ、ビニールを根本に巻く、防寒対策試験も実施しています。



誘引【平成29年5月15日】

冬を乗り越え、定植時50cm程度だった苗木も約3mまで成長しました。今年からワイン用ぶどう栽培の主流となりつつある垣根栽培をするために横方向への誘引が始まりました。



着果【平成29年6月2日】

2年目の春を迎え、ぶどう木の先端には多くの着果が見られるようになりました。

秋にはぶどうを収穫して、醸造試験を行う予定です。



現在【平成29年6月2日】

ぶどうは順調に生育しています。高冷地でのぶどう産地化の可能性は実証されつつあり、平成29年度中に9品種から事業化する品種を絞り、定植に向けた検討を行います。

## ニュージーランド産「カシス」 ～日本唯一のニュージーランド産カシスで生産量日本一を目指す～

カシスはスグリ科の紫色の小さな果実で、青森県青森市が生産量全国第1位です。カシスはヨーロッパ系とニュージーランド系の2つが主な品種で、ニュージーランド系品種は、健康効果に優れていることから価値が高いとされています。

産業課は、平成23年からニュージーランドのカシス苗を輸入して、挿木で苗を増やして栽培規模を拡大しており、青森市の年間生産量5トンを上回る産地づくりに取り組んでいます。

今後は生産量日本一に向け、生産計画と経営計画を作成し、生産を委託して本格的な事業化を図っていきます。



輸入【平成24年7月30日】

ニュージーランドから輸入した苗は、寒天培地で育てられた組織培養苗でした。

この培養苗を苗木に育成することは難しく、専門家のアドバイスを受けながらの栽培となりました。



移送【平成25年6月17日】

輸入から1年が経過。つくば市植物防疫所で大きく成長し、検疫も合格することができ、輸入から2年目で14本のカシスが富士見町に移送されました。



挿木【平成26年1月20日】

親苗14本から挿木増殖を開始。先例が無い中、町内農業法人と連携してニュージーランド生産者のアドバイスを受けながら手探りで増殖に取り組みました。



定植【平成27年5月21日】

挿木開始から1年半で約200本までカシス苗が増え、富士見町の大地にニュージーランド産のカシス苗が初めて植えられ、本格的な栽培がスタートしました。



指導【平成27年5月22日】

ニュージーランドのカシス栽培者を招いて、気象・栽培環境の確認と定植・栽培方法の指導を受けました。富士見町はカシス栽培に適している環境であるとの評価でした。



初収穫【平成27年6月30日】

初輸入から約4年の歳月を経て、カシス果実を約1kg初収穫しました。収穫した果実は、リキュールとジャム、ビネガーなどに商品試作しました。



施肥見直【平成28年10月25日】

2年目の収穫量が標準量を下回ったため、ニュージーランド栽培者とメールで情報交換し、秋主体の施肥に栽培方法を変更し、収量増加に取り組みました。



現在【平成29年6月2日】

施肥方法を変更した結果、着果状況は極めて良好で、7月中旬の収穫に期待が持てる状況となっています。

定植数も約450本となり、栽培規模も拡大され、日本一の産地づくりが着実に進んでいます。また、今秋には約250本を追加定植する予定で、秋定植にも取り組みます。

さらに平成30年度は2000本以上を定植し、事業化に取り組めます。